

《 古市古墳群の世界文化遺産登録を目指してがんばろー!!! 》

7月31日、真夏の太陽のもと円筒埴輪の模型が立ち並ぶ古室山古墳に、多くの市民、小学生、まなりくん、市関係者や当会の会員が集まりました。

午後4時過ぎに世界文化遺産の日本候補の決定が発表されました。

平成31年度の世界文化遺産登録決定に向け全員で“がんばろー！”を三唱し、熱気に溢れた記念すべき日になりました。

(広報部)



古室山古墳にて

《 世界文化遺産登録国内推薦候補に決定 》

文化庁の文化審議会は、昨年7月31日、平成31年(2019年)の世界文化遺産登録を目指す国内の推薦候補を「百舌鳥・古市古墳群」にすると発表しました。

3年連続4回目の挑戦でした。

いよいよです。「わが郷土に世界文化遺産が誕生!!!」が現実味を帯びてきました。

藤井寺市と羽曳野市にまたがる古市古墳群には45基の古墳が現存します。これらの古墳は4世紀半から6世紀前半にかけて形成されたことが知られています。

これまで文化審議会から指摘された検討事項を踏まえ、昨年3月に百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議が文化庁に提出した推薦書原案での「古市古墳群」の資産構成は、4世紀後半から5世紀後半に築造された、多様な墳形と大小様々な規模の古墳26基24件です。

藤井寺市内に点在する大きな緑の殆どは古墳で、これらは宮内庁管理になっている古墳のほか、四季折々墳丘に登りその景観を楽しめる古墳も含まれています。1600年以上前に築造されたこれらの古墳は、当たり前前の光景としてあまりにも身近に存在し、普段からなれ親しんでいます。

しかし、これらの遺産がこれまで維持されてきたのは、過去の人々が積み重ねた努力の結果であり、今後ともこの環境を後世に引き継いでいかなければなりません。

世界文化遺産がわが郷土に誕生するのかどうか。期待が高まりますがその結果はおよそ1年半後です。
(岩崎)

《 古市古墳群の世界文化遺産国内推薦に対する市民の声 》

- ◇世界遺産になれば凄いことだと思う。古墳の全体像が見えないので残念ね。高松塚古墳のように古墳の中に入れてほしいのに。でも道が狭く、世界遺産に登録されて多くの人に来たら、人の流れがうまくゆくのかな？ (40代女性)
- ◇百舌鳥・古市古墳群が世界遺産の国内推薦を受けたことを知りとても嬉しいです。古代は他の時代と比べ、情報が少なく、遺跡や遺物からしか歴史を知ることが出来ません。しかし、そこから当時の人々の暮らしや考え方を知り、時にユーモラスな表現に出会うことができます。そういった魅力をどんどん発信して行ってほしいですし、私も活動していきたいです。 (20代女性)
- ◇藤井寺市内は道が狭く、トイレや駐車場などの施設も整っていない。また天皇陵古墳は中に入れず、外から見ただけで世界遺産といえるのか。 (80代男性)
- ◇周辺に色々大小の古墳があるという感じで特に関心はない。古墳の歴史を知れば興味が湧くかもしれない。 (50代男性)
- ◇世界文化遺産登録への大きな一歩を踏み出した小さな古墳の街で、いろいろなイベントをして多くの人と関わることが出来たらいいと思います。 (お店屋さん)

ミニ・ウォークで聞きました

- ◇入れる古墳と入れない古墳があるのですね (小学生のお父さん)
 - ◇古室山でバンザイしたよ。(小学生)
 - ◇世界遺産になったらいいと思います。(小学生のお母さん)
 - ◇世界遺産になったら外国人がたくさんくるやろ。英語しゃべられへんからいやや～ (古墳好きな小学3年生)
- (取材者 小野、芳尾)



《 大伴家持生誕千三百年記念祭 》 9月23日(土)

秋空のもと大勢の人を迎え賑やかに「大伴家持生誕千三百年記念祭」が行われました。

この記念祭は、大伴家持生誕千三百年祭実行委員会の主催で、公益財団法人大阪観光局、藤井寺市、藤井寺市観光協会、伴林会、近畿日本鉄道株式会社の後援によって開催されました。

午前 11 時から生誕祭が始まりました。三嶋彰宮司が祝詞を奏上され、玉串がささげられ、その後、皇学館大学講師川合洋子氏の「大伴家持 1300 年記念祭によせて」と題した冊子をもとに家持の歌を主題に記念講演が行われました。

その中で伴林氏神社は軍事をつかさどった大伴氏の始祖、道臣命(みちのおみのみこと)を祭る全国唯一の神社である事、そして第二の国歌とも呼ばれた「海ゆかば」の起源の長歌を詠んだのも家持であり、「万葉集が万代(よろずよ)まで伝わってほしいという願いが込められている」ことなどを解説されました。講演が終わり大きな拍手が境内に満ち溢れました。(菱木)



《 第8回 あい・うおーく 道明寺南小学校 》 10月15日(日)

小雨模様の中9時30分定刻に道明寺南小学校を出発した。先頭A班は12名。

「僕 ここ知ってるよ」「ここ 先生と来たよ」と小学2年生のわんぱく少年は、大きな声で私や同行の小学5年生の姉に自慢そうに言って走り回る。両親は笑顔でガイドに頷いている。もう一組の5人家族は2歳ぐらいの女の子をベビーカーに乗せ、途中立ち寄った楯塚古墳の上まで登ってくる。気温も17度くらい、傘を差さない程度の霧雨でむしろ快適、絶えず子供たちのはしゃぐ声を聴きながらのウォークだ。



本年は仲姫命陵古墳、赤面山古墳、応神天皇陵古墳、三ツ塚古墳をまわる短いコースである。

天候不良のため、参加者は当初の51名が、約40名となったが、青少年指導員会のママさんたちが用意してくれた熱々の焼き芋やお菓子に、子供たちの更なる歓声で、当会の11名のガイドは逆に癒されるウォークとなった。

恒例の「あい・うおーく」は、藤井寺ライオンズクラブ、当市青少年指導員会、市教育委員会の共催、当会は案内役として参加し無事に終了した。(小野)

《 ふじいでら秋季ウォーク 世界文化遺産登録国内推薦記念 》 10月28日(土)

ふじいでら秋季ウォークが開催されました。あいにく朝から台風の影響による小雨模様になりましたが61名の方に参加いただきました。9班に分かれて、道明寺天満宮から允恭天皇陵古墳～応神天皇陵古墳～白鳥陵古墳～古市駅までの約8kmのコースを歩きました。参加動機を伺うと、リーフレットを見たという方が多く、中にはJ:COMテレビで知ったという方もおられました。そして何よりも世界文化遺産登録国内推薦決定効果が大きかったのか、参加者は大阪府下にとどまらず他府県からも多くの方がこられていました。どの方も古墳への関心が高く説明を真剣に聞いていただき、質問も多かったように思います。

駅前でお見送りする際「地元やけど、知らなかったことを仰山教えてくれて有難う」「春季ウォークも来るで」など嬉しい声を聞かせていただいて、ガイド冥利に尽きるとはこういうことなんだなあと思いました。私もお客様に喜んでいただけるようなガイドになれば、と気持ちを新たにしました。足元が悪い中、ご参加いただいた大勢の皆様、本当に有難うございました。今回が初ガイドの私にとって楽しい学びの1日でした。ご協力いただいた関係者の皆様に感謝いたします。(塩尻)



《 英語ガイド研究会の取り組み 》

当会内では昨年1月「英語ガイド研究会」を立ち上げ、4月より月1回定期的に会議を開き、毎回10名ほどのメンバーが参加しています。

活動の目標は英語ガイドを育成し、訪れた外国人に古墳等を案内することと、これらを通して楽しい交流「ウエルカム！」を展開することです。

昨年11月には教育委員会の協力をいただき、ALT (Assistant Language Teacher) の方を交えて、現地研修として英語で古墳ガイドを2時間行いました。今までの勉強の成果と英会話での交流を楽しみました。(広報部)

大井という村の東に、国府という村があります。

石器時代、縄文時代や弥生時代を経て、奈良時代には河内国府が置かれた地で、今は複合遺跡としての国府遺跡が残っています。

では今の大阪府庁にあたる河内国府の範囲はどこを差すのでしょうか。役所のある官庁街のほか、役所に勤務する役人やその家族らが住む官舎街も近くにあったはずです。

一説に、それは今の国府遺跡に建っていたとされる衣縫寺(衣縫廃寺)、林の伴林氏神社の西側にあったとされる^{はやし}拝志寺(拝志廃寺)、大井の志疑神社付近にあったとされる^{いのへ}井上寺(大井廃寺)、そして舟橋の北側に今の大和川の河床にあったとされる船橋寺(船橋廃寺)の4寺を四角に結ぶ線に囲まれた地域がいわゆる河内国府で、東端の衣縫寺付近に国府の官庁街があり、西端の大井寺や拝志寺付近は役人やその家族らの居住区域があったのでしょうか。

河内国府の西端にある官舎街には大勢の役人や従者、それらの家族が住んでいて、朝、国府の役所に出勤した夫を見送ったあと、奥さん達が炊事、洗濯、風呂沸かしなど日常生活に必要な水を汲む大きな井戸の周りで井戸端会議をしていて、子供たちは、その井戸の周りで鬼ごっこをして遊んでいたのかも知れません。

ちなみに、前号で触れた大和川の付け替えで田畑を失った大井の住人が幕府から貰った代替地というのは、大阪城の南、旧NHKの跡地あたりと伝わっていますが、でもあんなところに代替地を貰っても、どうやって耕しに通ったんでしょう。

古墳のある風景 11

川上 恵 エッセイスト

父親の匂いがする

津堂城山古墳は老いた父親の匂いがする。

春や秋の柔らかな陽射し、夏の木陰、冬の日溜り……、ベンチに腰かけると、大らかで武骨な父親に抱かれている気がする。節くれだった手が優しい。濠には菜の花、雪柳、桜、菖蒲、睡蓮、コスモス、そして梅と、四季の花々が古老の古墳を称え咲き競う。

だが父は傷ついてもいる。散策する人を拒まない墳丘の斜面は削れ、往時の地表が露出し、木の根が太い血管のようにくねくねと地面を這っている。それを眺めるたび、私は皮を剥がれた困幡の白兔を連想して辛くなる。だが古墳はそんなことは意にかいさず、堂々と疵をさらけ出し、堂々と花を咲かせる。これが家長の姿だとでもいうかのように。被葬者はだれか等、そんなことは些細なことだと、辺りの風景と同化している。

津堂城山古墳は古市古墳群で一番古い4世紀後半の築造だ。だが、その風格は古さだけからくるものではなく、この古墳本来が持つ品性や遭遇した悲喜こもごもが醸し出している気がする。人に人品があるように、古墳にも品格があると思うのは私だけだろうか。

叢から秋の虫の音が聞こえる。

津堂城山古墳

